

緊急提言．消失した里山につくられるオープンスペース（千里山北広場）とエコキャンパス

著者	吉田 宗弘
雑誌名	書評
巻	128
ページ	30-35
発行年	2007-09
URL	http://hdl.handle.net/10112/10963

緊急提言

消失した里山につくられるオーブンスペース

(千里山北広場) とエコキャンパス

吉田宗弘

はじめに

筆者は、『書評』一二七号(一八〜三五頁)において、「千里山キャンパスに自然はあるのか」という一文を寄稿し、関西大学千里山キャンパスが真のエコキャンパスに脱皮するために必要な事項を述べた。しかし、キャンパス内中央体育館裏の里山林一帯に対して行われているグラウンド設置と千里山北広場の造成工事は、エコキャンパス創出とはかけ離れたものになっている。今回、書評編集委員会の要請を受け、エコキャンパス創出のために大学がすべきことを、再度、緊急提言として述べてみたい。

里山林の撤去と千里山北広場の造成

キャンパス内に存在した里山林については前回に記したのであらためては述べない。ここでは今年度(二〇〇七年度)以降に起こったことをまとめる。里山林撤去を伴うキャンパス整備事業は、昨秋から開始されていたが、その全貌を筆者が理解したのは今年度に入ってからであった。本年の四月上旬のある日、筆者は里山林撤去の影響を調べるために、チョウ類群集のトランセクト調査をキャンパス内で開始した。その途中、体育館裏の造成区域に近づくと、延々と続くベージュ色のシートが、キャンパスとかつての里山林を隔てる壁として存在して

いるのを見た。そのシートの隙間から見えた風景は、自分の認識がいかに甘いものであったかを、十二分に思い知らせてくれるものであった。隙間から見えたのは、一面のむき出しになった白っぽい平らな地面、砂ほこり、そしてかろうじて残った数本の樹木であった。つまり、行われていたのは、樹木撤去という生易しいものではなく、山を削り、谷を埋めるといふ、「土地造成」そのものだったのである。前回の『書評』において、筆者は「里山林の撤去」といふ言葉を用いていた。これは、筆者が今回の工事を、樹木を撤去し、未整備の草原に生える植物を抜き取るという程度でのものあり、地形を変えるほどの「土地造成」であるとは認識していなかったことを示している。

よく考えてみれば、新たにグラウンドを設置し、さらに講義棟のような大型の建造物を据え得るスペースを確保するには、土地は傾斜面よりも平面であるのが好都合である。山を削り、谷を埋めるといふ作業は、その後の土地利用を考慮すれば、当然の選択肢であることは理解できる。しかし、筆者はそのような造成工事を思い浮かべることができなかつた。高度経済成長期やバブル期ならいざ知らず、「自然環境に対する世間の意識が高まっている現代」において、「大学という知的な機関」がブ

ルドーザーを投入して、「市街地に残る貴重な緑溢れる丘陵を取り潰す」といふ作業を堂々とするとは思えなかつたのである。しかし、その前兆はあつた。凜風館建設にあたって小山を丸ごと撤去したではないか。キャンパス内の私有地であるから、法的には何の規制も受けないのであるが、それでも周辺の住民はどのように感じただであらうか。関西大学は、「キャンパス整備に必要と判断した」場合には、世間がどう思おうと、「強い意志をもって」、「山や丘の一つや二つは堂々となくす」のである。まったく「強い関大」の面目躍如である。

しかし、「強い」の意味が違うのではないだろうか。教育・研究機関としての大学に求められる「強さ」とは、必要であれば「時の権力」に対しても抗うという、「強きをくじき、弱きを助く」といふものではないだろうか。都市にわずかに残る緑を、周りが何を言おうと意に介さずに取り潰してしまうという「強さ」ではないと思うのである。

他大学の状況

関西大学のこの「強さ」は他大学と比較しても際立っている。近隣大学のホームページを検索してみると、キャンパス整備事業においては、従来の自然や風景に配

慮し、残すべき自然・風景というものを決めていることがしばしば見受けられる。

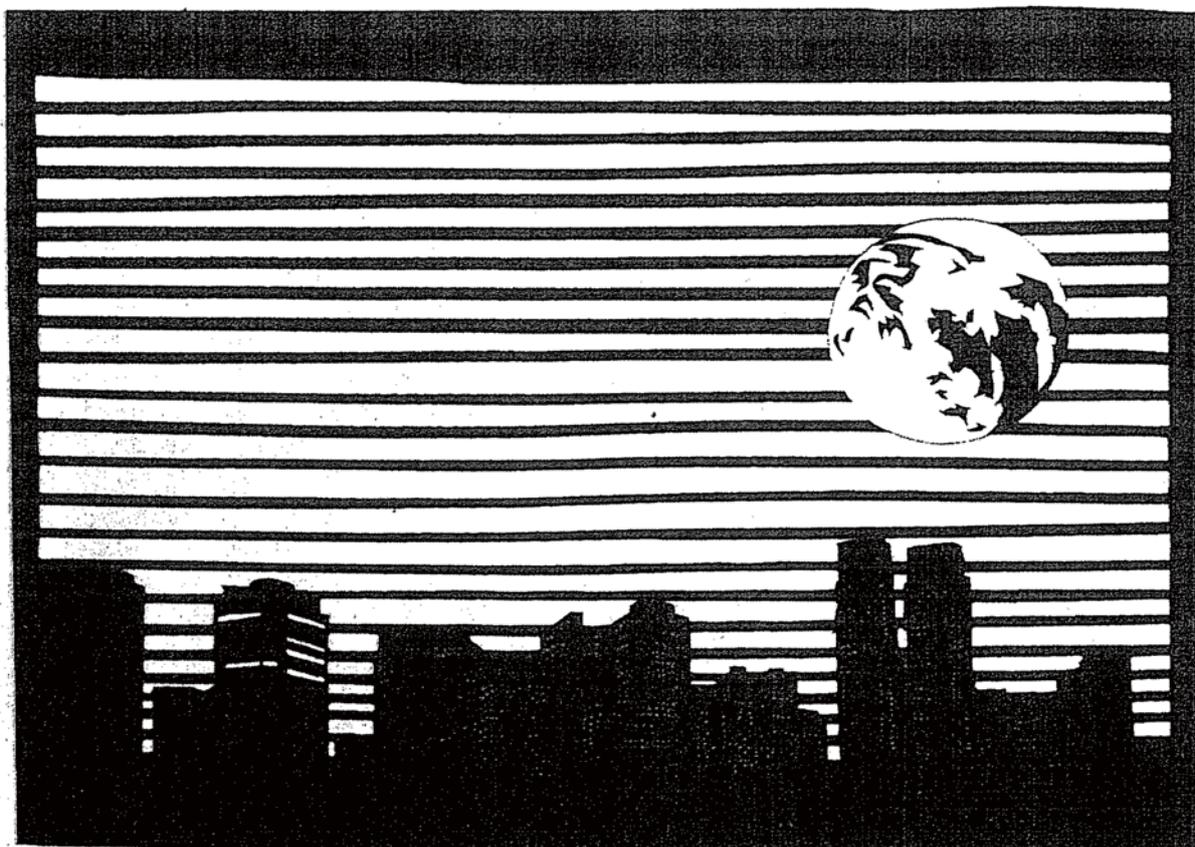
たとえば大阪大学キャンパスマスタープラン (<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/committee/cmp/cmp.htm>) においては、アンケート調査、学内関係者による議論、建築・都市・環境デザインの専門家による調査検討にもとづいて、継承すべき場所・風景をキャンパスごとに定めており、里山とため池は継承すべき場所と位置付けられている。このプランには次のようなくだりが記されている。「例えば、学生交流棟前は、ため池・里山・イ号館などの歴史的資源に接しており、交流棟や実践センターなどの公共性の高い建物に囲まれています。さらに、乳母ヶ谷池から伸びる歩行者の軸線を受け止める場所でもあることから、キャンパスのシンボル空間になり得るポテンシャルがあると言えます。現在、阪大にシンボルが無いと言われますが、阪大では、建物の形態や自然、周囲の風景との関係、人の活動、歴史やメッセージなどを総合的につなぎあわせながら、シンボリックな空間を育てていくことを目標としています。」ここには、学園のシンボルとなる空間は、新たな造成によって生まれるものではなく、従来から存在する自然や風景との調和によって生まれるという発想が存在している。

一方、京都産業大学『学園緑化構想』 (<http://www.kyoto-su.ac.jp/outline/co/gakuentenkakousou.pdf>) においては、学内の「緑化委員会」が、建物周辺や法面に、自然と調和する樹木の栽培を計画的に実施してきたことが述べられている。そして、京都市北区上賀茂に位置する神山キャンパスの整備事業は、行政や近隣住民と緊密な打ち合わせ・調整を重ねて実行され、京都市の自然風景保全条例のモデルケースといわれていることが誇らし気に記載されている。また、総合体育館着工時に行った盛土作業においては、盛土想定場所に存在していた苗木を集めて保管し、竣工時にもとの生態系に戻すべく植林をした結果、竣工七年を経て「かつての生態系」に戻りつつあるという。この整備事業の根底にも、「新しい樹木ではなく、かつてその地に存在していた風景を復活させる」というコンセプトが存在している。

さらに龍谷大学瀬田キャンパスでは、キャンパスに隣接する里山林を保存するだけでなく、この里山林を「龍谷の森」と命名し、二〇〇四年四月には文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業の採択を受けて「里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター」を設置している（広報誌『龍谷』No.58およびNo.59）。このリサーチプロジェクトでは、里山での生物多様性の維持機

構、里山と人間との関わりの歴史、現代社会での里山の位置付けなど、総合的な調査研究を行ない、里山に関する総合学である「里山学」を結実し、里山を軸とした地域社会の共生モデル「里山学・地域共生学」の確立を目指している。ここでは、里山はたんなるシンボルや風景ではなく、大学にとっても重要な研究テーマとなっているのである。

これらの大学のキャンパスは関西大学よりもより郊外に位置し、面積的にも余裕がある。千里山キャンパスとは条件が異なるかもしれない。しかし、「周囲との調和」、「残すべき風景の選択」、「新しい樹木ではなく、かつてその地に存在していた風景」というキャンパス整備のコンセプトは大いに参考にすべきであるし、導入すべきであろう。また、今回の主題ではないが、高槻キャンパスは条件的に、京都産業大学や龍谷大学瀬田キャンパスと類似しており、これらのコンセプト抜きに整備事業を行うことがあつてはならない。高槻キャンパス周辺の里山の保全状況はきわめて良好である。高槻キャンパスの整備が高槻駅前キャンパスの建設と連動して行われるのであれば、早急にキャンパス内の環境を維持するため委員会を立ち上げるべきである。



エコキャンパス創出に向けて

今年度のチヨウ類群集調査はようやく半分が経過したところである。まだ結論的なことはいえない。しかし、キャンパス内のチヨウ類群集が過去三年の結果に比較して、惨澹たる状況になっていることはいえそうである。里山区域に認められた種類だけでなく、すべての種のチヨウの数が激減しているのである。今年のキャンパスの自然環境は、都心部の大阪城公園よりも劣悪という結果になるのではと恐れている。前号において、真のエコキャンパスでは、植物がオブジェではなく、生態系を形成していなければならぬと述べたが、今年のキャンパスでは植物はオブジェでしかないようだ。

嘆いてばかりいても仕方がない。造成中の土地には「千里山北広場」という緑地ゾーンが形成される。そのゾーンのあるべき姿を述べてみたい。大阪大学キャンパスマスタープランや京都産業大学学園緑化構想の中には、キャンパスのシンボルとなる空間は、新たに造成するのではなく、かつてそこにあった風景を連想・再現させるものにすべきというコンセプトが流れていた。このコンセプトは北広場の構築にあたって、さらには既設の緑地ゾーンにも適用されるべきである。しかし残念な

ことに、千里山キャンパス内の新たな緑地ゾーンは、尚文館横の芝生広場の造成、旧生協跡地の人工芝広場の造成とクスノキの植栽、社会学部横のサクラ並木の設置など、上記のコンセプトとはまったく相容れないものになっている。このままでは、北広場も芝生とクスノキとサクラの緑地となる可能性が大きい^(注1)。この地に里山が存在したことを連想させるためには、是非ともサクラとケヤキ以外の落葉広葉樹を植えていただきたい。具体的には、エノキ、ムクノキ、クヌギ、ヤマモモ、クリなどが候補になる。これらの樹種は、『書評』一二七号に「鎮守の森から見た吹田の自然」を寄稿されたNPO法人吹田市民環境会議の平 軍二氏も推奨されているものである。平氏は、「万博の森のように、関大の敷地にも」ともあつた樹木を次世代に向けて植栽し、キャンパスを緑化されてはどうでしょうか」といわれている。同感である。

エノキやクヌギなどの樹種は秋に落葉し、春、一斉に芽吹く。様々に色付き落葉するさま、木枯らしの中に立つ枝だけの樹木、春から初夏にかけての芽吹きと新緑の鮮やかさ、いずれも季節を感じる情景である。これはクスノキのような常緑樹では感じることはできない。サクラのように、花が先に咲く樹木にもこの味わいはない。

大学上層部がこれらの樹木のもつ味わいに気付いてくれることに期待する。なお、次年度からは、教養教育が大幅に改訂され、来年四月からの新入生は「K群科目（関大科目）」という関西大学の歴史や関西大学と地域とのつながりを学ぶ科目を受講することになる。その中には、「吹田学」という、関西大学の存在する吹田という地域を総合的に学ぶ科目も設定される予定である。吹田に昔から存在した樹木を積極的に植栽することは、この「吹田学」を学習する上でも重要と考える。

（よしだ むねひろ・化学生命工学部教授）

（注1）原稿執筆後に、竣工された千里山北広場を歩いてみた。設置されたグラウンド斜面にはサクラ、クスノキの苗木に混じって、他の樹種の苗木も存在しているようだ。しかし、この夏の酷暑により枯死する苗木もあるだろう。もしも、苗木を追加されるのであれば本稿に述べた提案を採用いただければ幸いである。

切り絵 森祥吾



巣立ち